

気候変動国家賠償請求事件  
原告 白川 優子 外  
被告 国

証拠説明書（甲B〔法令、裁判例、政策資料等〕第1～27号証の2）

2025年12月18日

東京地方裁判所 御中

原告ら訴訟代理人

弁護士 島 昭 宏



| 号証  | 標目                             |    | 作成時期        | 作成者                     | 立証趣旨                                                                                                                                                      | 備考 |
|-----|--------------------------------|----|-------------|-------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| 甲B1 | 気候変動に関する国際<br>連合枠組み条約・外務省<br>訳 | 写し | 1992年5月9日   | 国連総会                    | 気候変動枠組条約を外務省が翻<br>訳をしたもの。                                                                                                                                 |    |
| 甲B2 | エネルギー基本計画(第<br>6次)             | 写し | 2021年10月22日 | 被告                      | 2050年カーボンニュートラル<br>(CN), 2030年度のGHG46%削<br>減(さらに50%の高みを目指す)<br>という目標達成に向けた日本のエネ<br>ルギー政策の方向性を示したこと、<br>可能な限り原発依存度を低減する<br>方針だったこと、温対計画と同時に<br>閣議決定されたこと等。 |    |
| 甲B3 | エネルギー基本計画(第<br>7次)             | 写し | 2025年2月18日  | 被告                      | 原子力回帰が打ち出されたこと、<br>火力発電は燃料構成比が示され<br>ていないこと、温対計画と同時に閣<br>議決定されたこと、日本のNDC提<br>出と同時だったこと等。                                                                  |    |
| 甲B4 | 地球温暖化対策計画(令<br>和3年)            | 写し | 2021年10月22日 | 被告                      | 第6次エネルギー基本計画と同時<br>に閣議決定されたこと、2030年度<br>において、温室効果ガス46%削減<br>(2013年度比)を目指すこと、さら<br>に50%の高みに向けて挑戦を続け<br>ることを表明したCN宣言を受けた<br>計画となっていること等。                    |    |
| 甲B5 | 地球温暖化対策計画(令<br>和7年)            | 写し | 2025年2月18日  | 被告                      | 第7次エネルギー基本計画と同時<br>に閣議決定されたこと、日本の<br>NDC達成のために排出削減と経<br>済成長の同時実現に資する地球<br>温暖化対策を推進する計画である<br>こと等。                                                         |    |
| 甲B6 | 地球温暖化対策計画の<br>概要               | 写し | 2025年2月     | 内閣官房、環<br>境省、経済産<br>業省  | 被告が設定する温室効果ガス及<br>びCO2削減経路には、国際的な<br>合意が反映されていないこと。                                                                                                       |    |
| 甲B7 | 日本のNDC(国が決定<br>する貢献)(令和3年)     | 写し | 2021年10月22日 | 被告(地球温<br>暖化対策推進<br>本部) | 2050年CNと整合的で野心的な目<br>標として2030年度に2013年度と<br>比較して、GHGを46%削減を目<br>指し、さらに50%の高みを目指す<br>としたこと、第6次エネルギー基本<br>計画、令和3年温対計画の閣議決<br>定と同時に提出されたこと等。                  |    |

| 号証     | 標目                                       |    | 作成時期        | 作成者                    | 立証趣旨                                                                                                                                                       | 備考 |
|--------|------------------------------------------|----|-------------|------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| 甲B8    | 日本のNDC(国が決定する貢献)(令和7年)                   | 写し | 2025年2月18日  | 被告(地球温暖化対策推進本部)        | 世界全体での1.5℃目標と整合的で、2050年ネット・ゼロの実現に向けた直線的な経路にある野心的な目標として、2035年度、2040年度において、温室効果ガスを2013年度からそれぞれ60%、73%削減することを目指すとしたこと、第7次エネルギー基本計画、令和7年温対計画の閣議決定と同時に提出されたこと等。 |    |
| 甲B9    | 脱炭素社会に向けた石炭火力発電所の位置付けに関する意見              | 写し | 2023年10月5日  | 国立環境研究所 増井利彦・日比野剛・久保田泉 | 温対計画及びNDCの削減目標を前提としたCO2排出量が、日本に分配されるカーボンバジェットを大きく超過すること。                                                                                                   |    |
| 甲B10   | 環境と開発に関するリオ宣言                            | 写し | 2003年11月25日 | 環境省                    | 国連開発環境会議で採択されたりオ宣言の内容等。                                                                                                                                    |    |
| 甲B11   | パリ協定                                     | 写し | 2015年12月12日 | 外務省                    | パリ協定の内容等。                                                                                                                                                  |    |
| 甲B12   | グラスゴー気候合意                                | 写し | 2021年11月13日 | 環境省                    | グラスゴー気候合意の内容等。                                                                                                                                             |    |
| 甲B13   | 判決紹介 オランダ最高裁 2019年12月20日「危険な気候変動被害は人権侵害」 | 写し | 2020年2月29日  | 気候ネットワーク 浅岡美恵          | アジェンダ事件におけるオランダ最高裁の判決の概要等。                                                                                                                                 |    |
| 甲B14   | 記事「気候変動法は『一部違憲』ドイツ議会に温暖化対策求める            | 写し | 2021年4月29日  | 朝日新聞 野島淳               | ノイパウアー事件におけるドイツ憲法裁判所の判決の概要等。                                                                                                                               |    |
| 甲B15   | 記事「気候危機は人権問題 欧州人権裁判所が初判決」                | 写し | 2024年4月11日  | しんぶん赤旗                 | スイス気候保護のためのシニア女性の会事件における欧州人権裁判所の判決の概要等。                                                                                                                    |    |
| 甲B16   | プレスリリース「韓国憲法裁判所が画期的決定」                   | 写し | 2024年8月30日  | 気候ネットワーク 浅岡美恵          | 韓国若者気候訴訟事件における韓国憲法裁判所の判決の概要等。                                                                                                                              |    |
| 甲B17の1 | 第5回CMA報告書                                | 写し | 2024年3月15日  | 国際連合                   | 2023年に開催されたCOP28において、パリ協定に基づくグローバルストックテイクについての初めての決定の内容。                                                                                                   |    |
| 甲B17の2 | 第5回CMA報告書(抄訳)                            | 写し | 2024年3月15日  | 原告ら訴訟代理人               | 同上。                                                                                                                                                        |    |
| 甲B18   | G7広島首脳コミュニケ                              | 写し | 2023年5月20日  | 日本政府                   | 日本政府のG7サミット(2023年5月)の首脳コミュニケにおける発言内容。                                                                                                                      |    |
| 甲B19   | 国際法 第2版                                  | 写し | 2023年9月21日  | 岩沢雄司                   | ・ICJの勧告的意見が、法的拘束力を有しないものの、高い権威を持ち、国際法の明確化に貢献してきたこと。<br>・国際司法裁判所と同じく国際的な司法機関である国際海洋裁判所が、「[ICJが]勧告的意見において行った司法的決定は判決において行ったものと同じ重みと権威を持つ」と述べたこと。             |    |

| 号証       | 標目                              |    | 作成時期       | 作成者   | 立証趣旨                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 | 備考 |
|----------|---------------------------------|----|------------|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| 甲<br>B20 | EU（気候変動を巡る法政策 抜粋）               | 写し | 2023年5月30日 | 大塚直 編 | EUでは、欧州気候法（法形式は規則（regulation）。2021年制定。）において、2050年までの排出削減目標を法的拘束力のある形で示していること等。                                                                                                                                                                                                                                                       |    |
| 甲<br>B21 | 英国（気候変動を巡る法政策 抜粋）               | 写し | 2023年5月30日 | 大塚直 編 | 英国は、2008年気候変動法において、炭素排出量の排出削減目標を法定しており、その内容は以下のとおりであること等。<br>①2050年については1990年比で最低でも80%削減、2020年に26%削減。その後、2009年改正で2020年目標は34%に引き上げられ、2019年の気候変動委員会からの助言を受けた法改正で、2050年目標は最低でも100%削減とされ、ネット・ゼロエミッションが法定された。<br>②上記気候変動法を受けて、イングランド以外のスコットランド、ウェールズ、北アイルランドでも、目標値の設定などがなされている。                                                           |    |
| 甲<br>B22 | ドイツにおける気候変動法制の進展（気候変動を巡る法政策 抜粋） | 写し | 2023年5月30日 | 大塚直 編 | ドイツにおいては、2019年、連邦気候保護法が制定されたこと、同法では、パリ協定の2℃目標、1.5℃目標を明記して、2050年カーボンニュートラルを宣言し（1条）、2030年までに少なくとも55%の削減を実現させると規定した（3錠1項）こと、同法以前から、連邦気候変動防止計画（2016年策定）によって定められていた政策目標（2050年に1990年比で80～95%のGHG削減、2030年までに1990年比で55%削減、セクターごとの目標など）を、法的目標に設定したものであること、気候変動防止計画の目標達成が難しい状況にあったことを踏まえ、目標達成への体制強化を図るため法的拘束力を伴う形で、セクター別目標を規定することとしたものであったこと等。 |    |
| 甲<br>B23 | 環境権と市民参加                        | 写し | 2024年3月    | 大久保規子 | 環境権について。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |    |
| 甲<br>B24 | 福島原発事故賠償の研究（抄録）                 | 写し | 2015年5月25日 | 淡路剛久  | 包括的生活利益としての平穏生活権についての見解。                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |    |
| 甲<br>B25 | 平穏生活権概念の展開——福島原発事故訴訟所判決を題材として   | 写し | 2018年7月    | 大塚直   | 福島原子力発電所事故における平穏生活権についての裁判例等。                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |    |
| 甲<br>B26 | 外務省ウェブページ「COP3」                 | 写し | 作成時期不明     | 外務省   | 1997（平成9）年12月に京都で開催されたCOP3において、先進国及び市場経済移行国の温室効果ガスの削減目標を定めた「京都議定書」が採択されたこと。<br>※2025（令和7）年11月25日最終アクセス                                                                                                                                                                                                                               |    |

| 号証             | 標目           |    | 作成時期       | 作成者      | 立証趣旨           | 備考 |
|----------------|--------------|----|------------|----------|----------------|----|
| 甲<br>B27<br>の1 | ICJ勧告的意見     | 写し | 2025年7月23日 | 国際司法裁判所  | 本ICJ勧告的意見の内容等。 |    |
| 甲<br>B27<br>の2 | ICJ勧告的意見(訳文) |    | 2025年9月30日 | 気候ネットワーク | 同上。            |    |

※特記あるものを除き、本書証はすべて写しである。